

# OPERA INOCHI

台本構成  
— 星出 豊  
作 曲  
— 錦かよ子

—キャスト—

中沢夏子(看護婦)	ソプラノ
松尾邦夫(医師)	テナール
山田昇(医師)	バリトン
岩村女医	ソプラノ
山田トシ(昇の妻・医師)	ソプラノ
奈々子(被爆した子ども)	ソプラノ
オサキ(被爆した市民)	メゾソプラノ
信夫(被爆した市民)	ソプラノ
武雄(被爆した市民)	バリトン
浩司(被爆した元入院患者)	テナール
トメ(被爆した元入院患者)	ソプラノ
看護婦(病院勤め)	メゾソプラノ
てる(隠れキリシタン)	ソプラノ
吉蔵(隠れキリシタン)	メゾソプラノ
役人	テノール
吉蔵の弟(隠れキリシタン)	ソプラノ
僧侶	バス
合唱・バックコーラス	バリトン
市民・他	黙役
子供の合唱	バス

| 参考資料 |

- 女子パウロ会編 「原子野からの旅立ち」
- 永井隆著 「長崎の鐘」「原子雲の下に生きて」「この子を残して」
- 伊藤莊著 「ヒロシマは語りつづける」
- 秋月辰一郎著 「長崎原爆記」「死の同心円」
- 調来助著 「長崎原爆体験医師の証言」

- 平和を祈る子の像碑文「原子雲の下で」作:磯本恒信  
作者不詳とされておりましたが2013年8月31日、  
オペラ「いのち」世界初演の日、調査にあたっていた  
長崎新聞社により、作者が判明致しました。

# 序幕 祈り

長崎の寺の梵鐘と教会の鐘が鳴り響く中、亡くなられた総ての方の冥福と、世界平和を願う僧の祈りが続く。

（松尾は、夏子の命日の墓参を済ませ帰宅途中、僧に出会い、夏子の好きであったつづじの花を貰う）

## 第一幕 一場（穴弘法寺近くの広場）

（時は一九八八年、場所は金比羅山の近く、穴弘法寺近くの広場。子供達が遊んでいる）（松尾六十八歳）

子供の合唱（片足とびを遊びながら） ピッパー ピッピ ブッパー

松尾「いつも子供の命は輝いている 夏子を亡くして三十八年早いものだ 時は移り 長崎は大きくな発展を遂げた しかし この地に残された災いはまだまだ つづいている」

（子供たち同じ遊びに飽きたのか、歌を歌いながら、老人の傍によってくる）

子供の合唱（輪遊びをしながら）蓮華咲いた 蓮華咲いた 今年の蓮華はよく咲いた こうしておくより どうたぼうがました 耳まで スッポンボン いて スッポンボン

（松尾老人つつじを丁寧に近くに置き子供達の中に入りていく）

松尾「わしが 鬼じゃな……」  
松尾「わーいおじいちゃんが鬼だ」

子供達「そんならかたらんね」  
(みんな一緒に輪をつくり踊り歌いだす)

子供達「蓮華咲いた 蓮華咲いた 今年の蓮華はよく咲いた こうしておくより どうたぼうがました

耳まで スッポンボン 耳まで スッポンボン  
松尾君は 元気でいいのう じいちゃんは 少し休むかな

子供1「じいちゃん そんならなんか(何か)話しぶ(を)して」

子供2「そうだ そうだ みんな じいちゃんの話 聞くか?」

子供達「そい(れ)がよか そい(れ)がよか」

子供1「そう云えば じいちゃん さつきつじ持つとつた

子供2「だい(れ)かにあけるとの?」

松尾「ハハハ……」  
さあ 話して 話して その花もらうとは どげん

（どんな人……？）

（子供の質問に言葉が出ない松尾は、話を逸らしながら）

松尾「あん(あの)海は 鶴の姿に見えんかい 長崎は鶴に抱かれた街 ぱってん これまでには 悲しか話が

たくさん あるとばい そして 今はおらん 多くの人が こげん(こんなに)輝かしい街にしたとばい」

子供1「そん(の)話に つづじは 出てくつと(くる)の?」

松尾「そうかもしれん 潮ぶりこぶり 潮んなきや ポチヤリン」

（子供の一人を抱き『長崎の遊ばせ歌』を歌いながら）

（横ふりに揃り最後に軽く地下ろす）

松尾「ホーレあそこが浦上天主堂」

子供達「そんくらいしつよ(そのくらいしつてるよ)」

松尾「あそこにも みんなの知らん いろいろな話があるとばい(あるのだ) このつづじは 雲仙つづじと云うてな……」

（叫びがだんだん静かになり、誰とはなしに歌い始める）

（松尾、そっと涙を拭く）

合唱「キリエ エレインソーン……」

吉蔵の弟「兄じやー 兄じやー キリエ エレインソーン……」

合唱「クリステ エレインソーン キリエ エレインソーン……」

（しばらく祈りが続いた後に）

役人「あれを見ろ！」

（松尾、あ…… 吉蔵）

合唱「吉蔵！ 吉蔵！(口々に)」  
てる 聖徳寺から連れて来たとは このわししゃ 吉蔵は  
やさしか よか男じやわしが 誘ったばかりに

んあるけん じいちゃんに行こうか？」  
子供達「いいな いいな じいちゃんに いけるばい(行く)  
けるよ) いいな いいな じいちゃんの話 听ける  
ばい(聞けるよ)いいな いいな じいちゃんのつづじ  
じいちゃんのつづじ」

（つづじを手にした子供、花に頬を寄せた）

子供達楽しそうに、歌を繰り返し歌いながら、松尾の手を引いて退場）

## 第一幕 二場（浦上四番崩れ）

（時は一八六七年浦上）  
(幻想的に紗幕の中で演じられる)

役人「キリシタンはご法度ぢや」  
合唱「そんな無慈悲な……お助けください！お助けください！ うちたちや(おいたちや)何(なん)も悪かこどばしとらんとになんでやー なんでげん(こんなに)ひとか(い)めにあわされんば、いかんと なんでや  
され！ うちたちや(おいたちや)何(なん)も悪かこどばしとらんとになんでやー なんでげん(こんなに)ひとか(い)めにあわされんば、いかんと なんでや  
なんでこげん ひとかめに なんでやー」

役人「邪教は 許されぬ！」  
合唱「何がいかんとです！ そげんこと！ひとかばい！な  
んでや！(口々に)」

（叫びがだんだん静かになり、誰とはなしに歌い始め

「げんめに（狂ったように）許してくれんね！ 許して！」

「くれんね！ 吉蔵！ あげん 僕に 可愛がられ 人にほくした男が こげな（こんな）目にあつとは」

（役人にわしを吉蔵の代わりに）

役人「そげん 死にたか（いか）か！ あわてることなか次は

おまえしゃ」

（吉蔵 許して……涙で声にならない）

（吉蔵が死ぬ どげんすれば（どうすれば）よかどー）

（合唱 静かに聞こえてくるキリエ エレイソン……）

吉蔵「おいは大丈夫や、てるを助けてやつてくれ

苦しみの ふかかれば ふかかほど デウスさまの

おくに 行けるとばい ハライソに デウスさまの

おくに デウスさまのおくには 美しかろう て

る元氣で！」

（吉蔵が満ちれば吉蔵は死ぬ……ハハハ……）

（明かりが消え）

## 第二幕 三場（病院の一室）

舞台は一九五七年（昭和三十二年）病院の山田医師の

病室に変る（山田五十二歳 松尾三十七歳 夏子三十二歳）

（夏子部屋を整理しながら、花瓶につつじの花を活けている）

（夏子「ラララ… 幸せを運ぶ 白い花 ラララ… 愛を

運ぶ 赤い花 ラララ…」）

（山田 夏子さん 何時もありがとうございました）

夏子「先生 起きていいましたですか？」

山田「また 素敵な声を聞かせてもらいましたよ」

夏子「先生は ご冗談が お上手ですから 私の好きなのは 雲仙つじ でも 手に入らないので 代用品

山田「雲仙つじの赤紫は 本当に素晴らしい」

夏子「先生 今日はとても気分がよさそうですが…」

山田「うなざされたのか… そう… 何時もの夢だ」

夏子「キリシタン迫害の…」

山田「百年にもならん時代のこと 人が人を殺す」

夏子「浦上のことですか？ 週々先生がお話している」

山田「そうです 長崎は 外国から 新しい文化を取り入れては 苦しんでいる」

夏子「私は 長崎のお祭り 大好きです 外国から入った文化… でも 僕で 長崎独自の文化に した

のですもの」

山田「長崎の歴史を多くの人に 知つてもらいたい」

夏子「先生 私の曾祖母は浦上で 埋葬しました」

山田「あなたも 長崎の歴史を 背負っているのですね

あの浦上の地は 大戦の傷跡だけでなく その昔に

は 日本人同士で傷つけあった歴史が…」

（山田はそれだけ言うと席をはずすように、窓から海を見ながらひとり言のように）

（十字を切り 静かに祈り 窓まで歩いて）

山田「（独り言） 大戦で焼け野原にされた長崎 原子爆弾の痛みを知った長崎 今尚苦しむ人々…人々の

幸せを祈らねば」

（松尾 分かりたいのです）

山田「それは 無理」

（松尾 先生の事も）

山田「もう よしなさい」

（松尾 市民の方の心も）

山田「それほど 簡単な事ではない」

（松尾 ハイ）

（山田 君は若いね）

（松尾 でも）

（山田（松尾を諫めながら）だが その若さが 長崎をすくっているのだろうが…）

（松尾「どうして 長崎に 原子爆弾を… それを考えただけでも」）

（山田 やめなさい それを今 君が言つて どうなる）

（医者は 現実の中で 戰うだけだ）

（松尾「長崎に落とされた 原子爆弾 白血病 ケロイド まだまだ…」）

（山田 やめなさい 私にすら 君の言葉は なんの 騒めにも ならない）

（松尾「わかっています」）

（診察に来つた松尾医師 中に入れず入り口で話を聞いているが、ついに言葉を発してしまう）

（夏子「ラララ… 幸せを運ぶ 白い花 ラララ… 愛を

運ぶ 赤い花 ラララ…」）

（山田 夏子さん 何時もありがとうございました）

（長崎の人（松尾））

山田「何故 よそ者！」

夏子「先生！」

山田「その考え方がない」

夏子「でも…」

松尾「よそ者は よそ者です」

夏子「松尾先生」

山田「君は医者じゃなかったのか…」

松尾「勿論 そのつもりです」

山田「毎日必死になつて 患者さんと向き合つています

しかし これほど 酷い 原爆の残した 傷の痛み

を 分かつてあげられないのです 気持ちはだけしか！」

山田「何が気持ちちだ！ 僕そつとなことを言うのではない 医者が すべての人の気持ちが分かるとでも思つてい るのかね」

山田「自分の愚かさを…私は苦しむ人々をおいて…妻を捜しに(大店で)」

夏子「そんな!」

山田「(冷静に)あの時の医学生たちの献身的な働きすべての力を出し切り治療をしながら倒れていつた学生はいぶんいたそれを思うとき申し訳ない気持ちで一杯だ」

松尾「あの時私は福岡にいました話だけしか」

山田「君には君の生活がある!あたりまえだ」

松尾「私はここにいる資格がないのです」

山田「やめなさい原爆が落ちたあの瞬間私は市内にいたそれなのに…医者は人を助けなければ…」

夏子「先生はあれ程努力なさったのに」

(三重唱)

夏子「強く生きる患者さんは皆励まし合い強く生きている私も負けたくありません強く生きたいのです強く」

松尾「前を向いて生きる患者さんは皆くじけず強く生きている明日の自らを求め日こと頑張つています被爆を重く捉えながら」

山田「なんと多くの若者が異なる文化を取り入れた祭りを楽しみ新しい世界を求めてこの港から出て行つたことか彦山に昇る月を眺め大志を抱いて出て行つたこの港」

三人「瓊の浦はすべてを知っている喜びも悲しみも」

松尾「その長い歴史の中に今があると思います先生の」

山田「いや私のしたことはほんの僅か私以上に責務と戦つた人は数多い日々に生きた人は何も語らず苦しみを乗り越えた子供や孫の幸せを祈つて」

夏子「私は父を原爆で亡くしました母と二人で遺体を庭で焼きました悲しみよりそうするしかなかつたのです内臓が焼けず三日間もかかりました」

松尾「え?」

山田「そのような方がたくさんおられた」

松尾「やはりそんな苦しみを夏子さんが被爆をしたのは知っていたがそんな苦しみ今まで私は医者として人々の苦しみにどう向き合えばよいのか」

(山田の方を見る)

夏子「泣くことを忘れ焼かれる父を見ていた」

山田「苦しみは人それぞれに違うのだ!その苦しみを背負つてみんなくしけず生きている」

松尾「分かっていますいえ分かろうとしています」

山田「でも何だね慰めでは人の心は救えないよ悲しいこと辛いことを抱きながらみなさん必ず死で生きているのだこの空の下でそれだけは知つてほしいな」

夏子「アーヴォカリーゼ」

(夕やけが窓から見え始める)

山田「…君たちは医療人として献身を忘れずに生きて欲しい」

松尾「でも先生の選んだ道は間違つていたのでしょうか?」

夏子「私は聞いています先生は爆風で髪を焼かれ全身灰でよこれて男女の区別さえつかない人々を助けようとしていたという話を」

松尾「私も先生は血まみれにギザギザになったガラスの破片で動脈を切り手を離すと血がびゅーびゅーっと飛び散りそれでも人々を助けようとしていたという話を」

山田「それは大げさだあの一瞬ながら出来た私は生まれ替わって本当の医者を経験したいあの日も暑い日だったな」

夏子「いつも集まつて遊んでいるのですよ先生」

山田「でんでらりゅうばでてくらばつてん…」

(静かにベッドから起き上がり窓から見える長崎港を眺めつつ)

子供の合唱「でんでらりゅうばでてくらばつてん…」

山田「あの子供達にだけは味わせたくない」

夏子「いつも集まつて遊んでいるのですよ先生」

山田「でんでらりゅうばでてくらばつてん…」

## 第二幕(原爆投下日)

ちには医者の使命を忘れてしまった自分を知つてほしかった

(静かにベットに横たわる山田)

山田「顔を横に振り松尾君私はようやく妻に会えるのかな…」

松尾「夏子先生…」

山田「…君たちは医療人として献身を忘れずに生きて欲しい」

松尾「でも先生の選んだ道は間違つていたのでしょうか?」

夏子「私は聞いています先生は爆風で髪を焼かれ全身灰でよこれて男女の区別さえつかない人々を助けようとしていたという話を」

松尾「私も先生は血まみれにギザギザになったガラスの破片で動脈を切り手を離すと血がびゅーびゅーっと飛び散りそれでも人々を助けようとしていたという話を」

山田「それは大げさだあの一瞬ながら出来た私は生まれ替わって本当の医者を経験したいあの日も暑い日だったな」

夏子「いつも集まつて遊んでいるのですよ先生」

山田「でんでらりゅうばでてくらばつてん…」

(静かにベッドから起き上がり窓から見える長崎港を眺めつつ)

子供の合唱「でんでらりゅうばでてくらばつてん…」

山田「あの子供達にだけは味わせたくない」

夏子「いつも集まつて遊んでいるのですよ先生」

山田「でんでらりゅうばでてくらばつてん…」

## 合唱(助けて!「苦しい」「熱か!熱か!」「お母さん!」)

山田「私の妻もあの丘の上で別れてそのまま…医者で助けて水水水熱か水がほしか…」

夏子「太陽の光が炸裂したとしたらこんなになつてしまつた皮膚がとけていく水をくれ!」

松尾「水!水!このままではみな死んでいく誰か」

山田「自分の愚かさを…私は苦しむ人々をおいて…妻を捜しに(大店で)」

夏子「泣くことを忘れ焼かれる父を見ていた」

山田「苦しみは人それぞれに違うのだ!その苦しみを背負つてみんなくしけず生きている」

松尾「分かっていますいえ分かろうとしています」

山田「でも何だね慰めでは人の心は救えないよ悲しいこと辛いことを抱きながらみなさん必ず死で生きているのだこの空の下でそれだけは知つてほしいな」

助けを 動けんこの足 見えんこの日 死ぬんか  
うちたちや おいたちや 死ぬんか だれが だれ  
が何をした なんとこげんひどか目に あわされ  
んばいかんと 水を 水を…」

(山田は出張中の病院で被爆。妻の女医と一緒に、自分の病院が心配になり戻る途中)

山田「オーケイ 水を飲んでいいかん!」

女医「飲まないで 飲んだら死んでしまうわよ」

山田「飲むな!水を飲んだら死ん! むごい むごい  
地獄とはこのことか」

女医「昇さん こんな光景 今まで見たこともないわ どうしたらしいの」

山田「分からん ひどすぎる あの瞬の紫の光が これほどまでとは 児黒焦げだ 救える人がいないかと来てみたが 我々だけではどうすることも出来ない」

(信夫キリストの足らしき像の瓦礫を持って抱えて飛び出してくる)

信夫「おいは キリスト様の足を 途中で拾ってきた  
何とかせんと」

女医「そんな事 言っている時じゃないのよ それだつて何だかわからないでしよう」

信夫「いや いや きっと きっと」

女医「そんなことより 大火傷してるでしよう  
歩けるの?」

信夫「もうだめだ 一歩も動けん」

山田「どうしようもない 治療どころではない  
元気な人を探して 皆を 安全な場所に運ばねば

病院も街も 一瞬の内 どうしたら どうしたら

女医「昇さんもすごい怪我」

山田「お前もすごいぞ 俺のことはどうでも良い この人を元気なうちに」

女医「ハイ でも どこへ」

山田「山を越せば 少しは良いかも とりあえず 山の上に」

女医「ハイ」

信夫「水 水 水をさがさんば…」

女医「さ 私に拘まつて 一緒に行くのよ あなたにとつて 大切なものたつて分かるけど お願い ここにおいて それ」

山田「何を言っているのだ! サ 安全な場所を探すのだ」

(信夫泣く)

女医「あなたの命と どっちが大切なの!」

(信夫を無理やり連れて行く)

山田「トシ 後で会おう」

女医「昇さんも 気をつけてね!」

山田「元気なひとがいたら 手伝いを頼むしかない 病院は全て崩れ 浦上は救いようがない ここにいる人

だけでも 助けねば どうすれば どうすれば 良いのだ 一体これは どうしたことだ あまりにも被害が大きい」

(オサキが泣きながら出てくるのとぶつかる)

山田「天丈夫か?」

オサキ「工場の屋根が 飛んでいた 火傷ばしとる

子供が家におるとよ 歩いてでも 帰らんば」

山田「氣をつける!」

(それだけ言って 山田は急ぎ退場

足に傷を負った奈々子が泣きながら、走り出てくる)

奈々子「母ちゃん! 母ちゃん! うち うち…」

(オサキをつかまえ、しがみつく。オサキは逃げようと思ひ死である)

武雄「お前は どうやって 助かつたと? 水 もつとらんか?」

奈々子「うち 防空壕に入つとつた これ飲む? (水筒を渡す)」

武雄「奪うように取りながら」「有難う… だれか 一緒ね?」

奈々子「みんな 死んだ 防空壕 出たら 一面 人間が 真っ黒で まいてあつた 生きてたもんも 死んでききよつた 家にもどつたら なんも無かつたと そして みんな 死んどうた」

武雄「これから とげんする?」

奈々子「分からん これ いつたいとげんしたと?」

武雄「アメリカが 大きな爆弾落したと 落下観見とうてつ二つ 三つを言おうとしたら 凄か光と 音

奈々子「死んだ(泣く)」

武雄「そうか 天国へ行つたら きっとかあちゃんに会え やつた あとは おぼえとらん かあちゃんは?」

奈々子「天国で会える? 天国は 遠かやろ 行けんか もしれん」

武雄「あわてんでよか きっと 会えるけん 水 水 水 ばもう少しくれんね?」

オサキ「ごめんね おばちゃんも どうしようもなかとよ (奈々子を抱きしめ)

おばちゃんも 子供がおるとよ つらかろう おばちゃんも つらかとよ 助かつて 幸せになつてくれ

んね 戦争が 戦争が わるかと 元気で また会おうでね

合唱「アーアー・・・つらかろう つらかろう 戰争が 戰争がわかるかと」

奈々子「よかよ・ハイ」

(栓を開けて渡す。武雄遠慮せず一気に飲み干してしまふ。そして倒れる)

武雄「ありが・とう がんばって 生きんばよ・・」  
奈々子「おじちゃん おじちゃん! おじちゃんも死ぬと? いやや いや 死んでしもうとる 水が 水が 悪かつたと? おじちゃん おじちゃん うちが いろしたと? 何で なんで・:(泣く)」

(人々武雄を運ぶ。夏子、徹夜勤務で自宅に帰り、防空壕に入ろうとした時に被爆。勤務先の病院に駆けつける途中で 奈々子が泣いているのを見つける)

夏子「どこから来たの 早く帰らないと(奈々子 夏子に寄り添う)

(独り言)この場所が これ程酷いなら この先はもう無理かも (奈々子に)さ 急いで!」  
奈々子「天国に行つたら おじちゃんにも 会えると・」

(奈々子の足の火傷に気が付く)

夏子「あなたも怪我をしてるじゃないの 痛いでしよう? 名前は?」

(夏子タオルを取り出し、足の傷口を紳つてあげる)

奈々子「奈々子・(奈々子 夏子にしがみつく) おねえちゃんもう一度 昔にかえして・あああ(泣く)」

(夏子しっかりと奈々子を抱き)

夏子「そんなこと 言わないで おねえちゃんも 泣きたくなってしまうでしよう」

(奈々子泣き崩れるが 夏子静かに抱き起し)

一重唱

夏子「こんな子供まで こんな子供まで 悲いわ 本当に悔いわ それしても 皆 ここまで 逃げてきたの だわ本当に悔いわ 地獄だわ この子を何とか 助

けてあげなきや ああ どこへ連れて行けば・・きつと浦上は駄目だわ 病院も無理・・」

(奈々子、夏子から離れながら)

奈々子「があちやんがほしか どうちやんがほしか 兄ち ゃんもほしか 妹も みんな 生きていてくれたら うち うち もっと もっと いい子になるけん 死んだ 真っ黒の かあちやんの ひざで 抱かれて みた はじめは あつかたと でも だんだんつ めどうなつた かあちやんといった東望の浜 きれかつたな とうちゃんと来た 金毘羅さん きつかつた

(松尾・夏子、仕事を終え 気晴らしにグラバー邸に来ている)

夏子「グラバー邸つてすてきだわ」

松尾「ある晴れた日・・か」  
夏子「先生は クラシックがお好きだから オペラの蝶々夫人知ってるでしよう?」

松尾「勿論」  
夏子「あそこから ピンカートンの船が入ってきたんだわ」

松尾「軍艦がね ハハハ」  
夏子「あんなに遠いのによく白って分かったわね」

松尾「そこまで知ってるのは たいしたもんだ」

夏子「当たり前でしよう 私は長崎の生まれですもの 歌いましょうか?」

松尾「港から 大砲の音(手をたたきドーナと声を出す) 松尾 Il campane del porto」

(観光客少しずつ集まつて聴いている)

夏子「Bianca bianca il vessillo americano delle stelle

なんだかオペラ歌手になつたみたい」

男性「フランボー こで聴くバタフライは格別だ!」

女性「知りもしないくせに」  
男性「そりゃ・でも あの蝶々夫人だろう?」

女性「オベラつて知てるの?」

男性「オベラ・オベラねえ」  
松尾「このバタフライは 長崎の女性の悲劇を 美しい音楽で描いているのです」

男性「へえ・・」

女性「失礼しました さあ行きましょう」

松尾「長崎を楽しんでください」

文化も異国情緒たっぷりだ このグラバーさんは諸国を漫遊したそうだよ 諸国を漫遊? 日光に鱗を放したのもグラバーさん 東照宮には 長崎から贈られた梵鐘があるそうよ それ知ってる? (へえ 知らなかつたわ そんなこと 美しい海港が見え 美しい坂の街 汽笛が聞こえる 洋館も沢山残っているし 教会の鐘も聞こえる 汽笛が誘う なんだか外国にきてるみたいね)

松尾「(夏子に)良いオペラだ。この女性は本当に熱い」

夏子「日本で初めてオペラが演奏されたのは出島なによオランダ語で演奏されたんだそうですけど」

松尾「さすがは夏子さん」

夏子「今日は日曜日だし、大勢の方が来てくださっていますね」

松尾「市民が頑張ってここまでにしたのさ」

夏子「私は長崎って大好き。夢が一杯詰まっているみたい」

い

(元入院患者が二人を見つけて走ってくる)

浩司「先生たちもおつたですか?毎年・毎年

仲間が減つてきよつです」

トメ「夏子さんも元気ですか?」

夏子「トメさんもお元気そうね。嬉しいわ」

トメ「先生:原爆は本当に恐ろしかった。後悔後悔でも」

夏子「もうやめましょう。戦争が無くなるように皆で頑張らなくつちや」

松尾「そうですよ。私たちが伝えなければ戦争のありのままの姿を」

浩司「そりやそつたい。おいたち生きとる者(もん)がなんとかせんば死んだ仲間が可愛そか」

浩司「世界は一つ。宇宙は丸い一つの命。戦争はいかん」

トメ「戦争はいかん」

二人「世界を平和の花でうずめんば。皆に言わんばおいたちしかおらんと。戦争やめること。皆で言わんばいのちをいのちを皆のいのちを戦争が奪つてはならんと」

夏子「そうよね。二度とこんな悲劇を起こしてはいけないわ。戦争の無い世界を創らなければ力を合わせて」

トメ「そう言つてもわしらだけで何ができると。だいぶかわらば助けてくれると」

浩司「わからん。でも皆に言わんば」

松尾「そうだ。宇宙は丸い一つの命だからな。体験者は君たちだけなんだ。頑張つてほしい」

夏子「みなさんお疲れが出来ないうちに帰らなば」と

松尾「今日は一番星が早いな。宵の明星がもう輝いてる」

浩司「では先生」

トメ「夏子さん」

夏子「先生有難う!」

二人「はい。」

(夏子走り出し、帰りかける)

松尾「あの方たちを献身的に治療した山田先生を思い出すね。山田先生は偉大な方だった。自分の病氣を知つていてあれほど人に近くせるしかし先生の人生も複雑だったのだな。私がどう逃げたいときには逃げるし愛する人のためならなんでもしていたと思う」

夏子「山田先生は結局ご自分の理想どおりには生きられなかつたのでしよう。現実と理想難しい問題ね」

松尾「先生は苦しまれた。しかし辛くとも弁解はおしだらなかつた」

夏子「ええ」

松尾「私とは違う見事な生き方」

夏子「先生バタフライには素晴らしい二重唱がありま

松尾「この世の中に原爆などまさかと思ってブツチ一すね」

松尾「生きてる喜びを」

夏子「愛の歌を」

松尾「丁度この時間でしよう」

夏子「夕闇が私たちを閉む静かな夜」

松尾「ただ一人」

夏子「親戚も皆から去つてしまつた。でも幸せで

松尾「Vlente la sera」

夏子「l'ombra e la quiete」

松尾「E sei qui sola...」

夏子「Sola e rimangata Rinnegata... e felice...」

(注 イタリア語歌詞は前に歌つた日本語の意味とほとんどの同じ)

夏子「とてもきれい。素晴らしい私も幸せ」

松尾「僕も幸せた。今日本の皆の努力で本当に素晴らしくなつた。そういう夏子さん結婚の話

いつも途中で終わってしまいます。何か理由でも?」

看護婦「いいえわたし:先生のこととても尊敬していま

すわ」

松尾「それならば返事を聞かせてください」

夏子「先生有難う!」

(夏子走り出し、帰りかける)

松尾「夏子さん」

(振り向き静かに松尾を見る)

夏子「(独り言)お話をすべきかでも…では先生」

(夏子走り出し、帰りかける)

松尾「あの方たちを献身的に治療した山田先生を思い出すね。山田先生は偉大な方だった。自分の病氣を知つていてあれほど人に近くせるしかし先生の人生も複雑だったのだな。私がどう逃げたいときには逃げるし愛する人のためならなんでもしていたと思う」

夏子「邦夫さん…私も被爆者なのごめんなさい!」

松尾「あなたが被爆者なのは知つている。それが何故いけないので」

夏子「あなたを幸せに出来ないかもしません」

松尾「何を言つているのだ。いのちの果てる日は我々に

は決められないのだ」

夏子「邦夫さん…私も被爆者なのごめんなさい!」

松尾「あなたが被爆者なのは知つている。それが何故いけないので」

夏子「あなたを幸せに出来ないかもしません」

松尾「何を言つているのだ。いのちの果てる日は我々に

浩司「先生、先生、松尾先生！先生、夏子さんが！」

松尾「どうした！」

浩司「夏子さんが倒れた。救急車で今……」

(泣いて言葉にならない)

松尾「まさか！彼女は大丈夫だね？」

浩司「大丈夫です」

浩司「早く早く」

(松尾、走って退場)

(紗幕降りる)

(紗幕降りる)

### 第三幕 一場 (病院の庭)

(紗幕前)

(松尾と岩村が歩いてくる)

岩村「松尾先生 夏子さんは絶対に先生には言わないで

と 言っていました」

松尾「岩村先生、私も知っていますが 夏子さんはそんなに悪いのでしょうか？ 私の頭では 決して何も……」

岩村「私は 一年前から すべてを知つて治療してきました 告知も でも 夏子さんと 約束したのです

松尾先生には 何も知らせないと

松尾「何故 わたしに なぜ 云えないのでしょうか？」

岩村「女の気持ちは きっと あなたには 分からないで しよう 燃けただれた痕を 好きな人に 好んで見せたいと思ひますか 私も 被爆者 好きで好きで どうしようもない 彼をあきらめました たとえ 生き残つても 残りの人生を：女の幸せを うばわれる 本当の原爆の恐ろしさは あなたには わからぬでしよう

幸せつてなんでしょう 愛する中の 苦しみ 苦しみの中の 愛 海を愛し 花を愛し 日々の中に 人の哀れだけが残る それが 人の一生なのかも 戰えど 戰えど壁が いつも 私の前にある あとで カルテを 見に来てください……」

松尾「やはり 私は よそ者であつたか あの涙 夏子の涙の真実を 私は 見抜けなかつた 私は必ず 説得しよう」

(松尾退場)

### 第三幕 三場 (病院の一室)

(松尾が見舞いに来ている)

夏子「邦夫さん……ごめんなさい」

松尾「目が覚めたようだね。」

夏子「いいんだ。君のことは知っていたよ。」

夏子「許してください。本当のことが云えなかつたの」

松尾「きっと 僕たつてそうしたよ……気分はどう？」

夏子「もう大丈夫 窓を開けて下さる……」

(邦夫窓を開ける)

(遠くおくんちのシャギリ・コッコデシヨが聞こえてくる)

(夏子首を繩に振る同時に澄んだ鐘の音がなる)  
夏子「邦夫さん この歌 知つている？」

原子雲の下母さんにすがつて泣いた  
ナガサキの子供の悲しみを

二度とくり返さないよう

世界の子供の上に

いつも明るく太陽が輝いていますように

松尾「勿論 知つているよ いつも明るく太陽が輝いていますように」

世界の子供の上に

いつも明るく太陽がががやいていますように」

夏子「奈々ちゃん 私がんばるからね

邦夫さんと一人で がんばつて生きていくからね」

邦夫「日本は きっと 世界を平和へ導くだろう」

奈々子「つづじの花の咲く頃 また 会えるよね

つづじの花の咲く頃 二人が幸せになれるのね

奈々子「つづじの花の咲く頃 幸せが きっとくるよね」

(合唱の中に字幕が浮き上がる)

(字幕)一九六〇年結婚 松尾夏子となる

(字幕)一九六一年夏子死す

寺の梵鐘 教会の鐘が鳴り響く中

一人の僧の祈りが続く

(松尾一人)

り 僕と共に生きよう！」

幕